



『世界教育学選集』への監修者等の関与についての一整理

松本，圭朗

(Citation)

研究論叢, 30:79-88

(Issue Date)

2024-06-30

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100491463>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100491463>



『世界教育学選集』への監修者等の関与についての一整理

松本 圭朗

(神戸大学大学院人間発達環境学研究科博士後期課程)

第1節 はじめに

教育は、民族の実験だと私は考えている。

—勝田守一 (1968) 『歴史と医学と教育と』『思想』548号、79頁。

かつて、矢野智司は戦後教育学／近代教育の「カノン」を問い、その「カノン」によって隠されてきたテキストとの邂逅を求めた(矢野 2010)。矢野が戦後教育学の「カノン」の1つとみたのが、明治図書出版が刊行した『世界教育学選集 (全 100 巻)』であり、「この選集・選書は 60 年代から 80 年代にかけての教育学研究のカノンとなった」という(矢野 2010 : 168)。『世界教育学選集』は、「教育科学関係の著作者や新教育学の推進者の著作は近代教育学として高く評価」している一方で、ナチスや京都学派に連なる教育学研究者の著作、あるいは、「戦後教育学にとっては国家主義的な思想書として直ちに否定されるべきもの」は含まれていないという(矢野 2010 : 168)。そして、矢野は『世界教育学選集』という「カノン」以降、「私たちの教育的思考が制限」されたと指摘する(矢野 2010 : 168)。

ところで、『世界教育学選集』は、明治図書出版が創業 50 年記念事業と創業 60 年記念事業の 1 つとして企画し、1960 年から 1983 年にかけて全 100 巻を刊行したものである。その監修を務めたのは、東京教育大学の梅根悟(1903-1980 年)と、東京大学の勝田守一(1908-1969 年)である¹⁾。

梅根と勝田が監修を務めることになった背景は、『明治図書 50 年史』から窺い知ること

ができる。『世界教育学選集』の刊行の数年前、勝田は木田尚武²⁾との雑談で「教育学の古典について、現代の問題意識で、研究を継続してみたい」と発言したところ、後日、木田から創業 50 年記念事業を念頭に置いた「古典叢書」の翻訳出版という提案がなされたという(勝田 1960 : 81)。この提案に対して、勝田は「その方面に造詣の深い梅根さんがやって下されば、ぼくもお手伝いさせて貰ってもいいと思った」とし、「藤原社長の意欲的な要望」で決定したという(勝田 1960 : 81)。

一方の梅根は、「藤原さんの決意をきいて私たちは、このしごとの企画と推進のしごとに協力することになった」(梅根 1960 : 80)と振り返っている³⁾。また、その 10 年後には、「私は終戦後間もないころから、いくつかの著作の筆者あるいは監修者として関係してきたわけだが、何といっても最大のしごとは世界教育学選集の企画であった」(梅根 1970 : 52)とも回顧している⁴⁾。

梅根と勝田は監修者として、『世界教育学選集』の冒頭に「この選集をよまれる人びとに」を掲載している。そこには、「世界の高い水準に達した教育的諸文献を、自由に研究し、先人がその社会と時代において組織した教育的理論から学ばなければならない」として、「それは、単に、歴史的興味や過去への回顧のためではなく、まさに今日における教育発展の基礎たるべき教育理論の構築のためなのである」と記されている(監修者 1960 : 1)。そして、「私たちはこれらの労作を通じて人類の幸福と社会の進歩を求めて、教育に期待をかけ

た人びとのヒューマニズムと科学的探究の精神を、教育文化の遺産として継承し、これを守り、発展させることを目指し、私たちの教育研究を深めてゆきたいと思う」（監修者 1960：2）とも記されている。

こうした監修者の想いを踏まえて、『世界教育学選集』は、「わが国以外の世界のすぐれた教育的諸文献を日本語に移して、教育者および教育研究者の便に供したい」（監修者 1960：1）とされている。その具体は、次のように記されている（監修者 1960：2）。

選集の邦訳は、それぞれ、原著者について専門的に研究している人びとによって行なわれている。大部分は忠実な完訳を旨としたが、やむをえない事情、たとえば、余りにも大部なものは、適当に省略を加えた。しかし、そのことによって、原著に学ぶ価値を減少しないように努力した。なおこの選集の刊行を継続して行ない、私たち日本の教育者および教育研究者に容易に利用できる資産を豊富にすることを期したいと思う。

この原則に則って、「世界の高い水準に達した教育的諸文献」の選定、翻訳がおこなわれた。

前述の矢野は、ここに戦後教育学の「カノン」の成立をみると同時に、それが与えた影響を問うた。しかし一方で、梅根と勝田は監修者として、『世界教育学選集』にどのように関わったのか。すなわち、『世界教育学選集』という「カノン」の成立の途を辿り、それを問うことも必要ではないだろうか。その具体について知る 1 つの方法が、『世界教育学選集』に記された「訳者まえがき／あとがき」や「解説」を紐解くことであろう。

本資料では、『世界教育学選集（全 100 巻）』（1960 年～1983 年、明治図書出版）への監修者等の関与の手がかりを得ることを目的とし

て、「訳者まえがき／あとがき」や「解説」等から監修者や協力者への言及を整理した。こうした作業によって、戦後教育学が試みた実験における研究倫理・行動規範——「カノン」——に係る事項が広く浮かび上がってくるだろう。

註

- 1) 梅根は、「勝田守一との共同監修『世界教育学選集』（全 100 巻）（1960-86）においては、総勢 100 人以上の研究者を率い、勝田の死後（1969）、その事業を達成」（山崎 2017：48）したと紹介される場合がある。
- 2) 木田は、明治図書出版編集部の社員である。
- 3) 勝田と梅根に監修を依頼した明治図書出版社長の藤原政雄は、『世界教育学選集』について、「この戦後教育のつき当った壁を打ち破り、今後の日本教育を打ち建てる方法の 1 つとして、わが国の風土に育った過去教育遺産を学びとるとともに、世界各国の教育学の遺産を学びとらねばならぬことでしょう」として、「すぐれた世界の教育的文献を翻訳し、一般の教師が容易に、世界の先人がその社会と時代において組織した教育理論を学べるものを出版しよう」と述べている（藤原 1960：36）。藤原の発言を踏まえれば、教育学界における出版史の検討も求められるだろう。なお、編集担当となった嶽崎峻は、梅根の回想文を残している（たけさき 1981）。
- 4) なお、『世界教育学選集』の第 2 期の出版予定が『明治図書 60 年史』に掲載されている（明治図書出版 1970：115）。別表 1 として整理した。

別表 1：『世界教育学選集』第 2 期の刊行予定一覧

巻	書誌
51	ラヴェットほか『イギリス民衆教育論』
52	フーリエ、サン・シモン『空想的社会主義教育論』
53	フィヒテほか『大学理念と構想』
54	垣内松三『形象と理念』
55	フィヒテ『ドイツ国民教育論』
56	カント『教育学講義』ほか
57	篠原助市『批判的教育学の問題』
58	阿部重孝『教育改革論』

59	エマソン『教育論ほか』
60	エレン・ケイ『児童の世紀』
61	エストライヒ『弾力ある統一学校』
62	ブロンスキー『生産学校論』
63	クインチリアヌス『雄弁家教育論』
64	ドブロリユーボフ、チェルヌイシェフスキー 『革命的民主主義教育論 1』
65	ベリンスキー、ゲルツェン 『革命的民主主義教育論 2』
66	福沢諭吉『教育論』
67	デューイ『初期教育論集』
68	ケルンシュタイナー『労働学校論』
69	グーツムーツ『体育教育論』
70	セガン『特殊教育論』
71	タゴール、ガンジー『教育論集』
72	ヘルツレほか『プロレタリア教育論』
73	—『イタリア・ルネッサンス期教育思想』
74	—『フランス革命期の学校制度案』
75	—『アメリカ独立期国民教育論』
76	—『大正新教育論集 1』
77	—『大正新教育論集 2』
78	アマイト編『ドクロリー法』
79	森徳治『教育論』
80	アウグスチヌス『教育論』
81	舒新城『教育論』
82	モリス『芸術教育論』
83	ラ・シャロッティエ『国民教育論』
84	ベスタロッティエ『シュタutz孤児院期ほか』
85	ヘルバルト『世界の美的表現ほか』
86	ザルツマン『かこの書ほか』
87	オーエン『社会についての新見解』
88	シャッキー『美育論』
89	バーカー『地理教授論』
90	ド・モラン『新教育論』
91	モンテッソーリほか『幼児教育論』
92	フレールほか『幼児教育論』
93	ルッター『教育論』
94	ヴィルマン『陶冶論としての教授学』
95	ユンゲ『生活共同体としての村の池』
96	ペイリー『自然学習論』
97	ペリー、クライン『数学教育論』
98	バイエル『初等科学教授論』
99	ブルードン、コント『教育論』
100	トウニイ『すべての者に公教育を』

引用文献

- 梅根悟 (1960)「世界教育学選集についての念願」明治図書出版『明治図書 50 年史』明治図書出版、80-81 頁。
- 梅根悟 (1970)「世界教育学選集のことなど」明治図書出版『明治図書 60 年史』明治図書出版、52 頁。
- 勝田守一 (1960)「世界教育学選集の誕生」明治図書出版『明治図書 50 年史』明治図書出版、81 頁。
- 勝田守一 (1968)「歴史と医学と教育と」『思想』548 号、68-79 頁。
- 監修者 (1960)「この選集をよまれる人びとに」カー・デー・ウシンスキー著、柴田義松訳『教育の人間学 1 (世界教育学選集 1)』明治図書出版、1-2 頁。
- たけさきしゅん (1981)『『世界教育学選集』の監修』

『生活教育』386 号、184-185 頁。

藤原政雄 (1960)「教育出版と私の道」明治図書出版

『明治図書 50 年史』明治図書出版、29-42 頁。

明治図書出版 (1970)『明治図書 60 年史』明治図書出版。

矢野智司 (2010)「近代教育学を思想史研究として問うことは何を問うことだったのか」『教育思想史コメンタール』編集委員会編『教育思想史コメンタール』教育思想史学会、163-173 頁。

山崎洋子 (2017)「梅根悟」教育思想史学会編『教育思想事典 (増補改訂版)』勁草書房、48 頁。

【凡例】

1. 監修者 (梅根悟と勝田守一) は太字とした。
2. 特記事項が無い場合は、「——」とした。
3. 引用頁は [] 内に示した。

【付記】

本研究は JSPS 科研費 JP22K20295 の助成を受けた。

巻	著者・編者	年	書名	訳者・編者	コメント
1	カー・デー・ウシンスキー	1960	教育的人間学 1	柴田義松	—
2	カー・デー・ウシンスキー	1960	教育的人間学 2	柴田義松	—
3	ア・エス・マカレンコ	1960	集団主義と教育学	矢川徳光	—
4	ジョン・ロック	1960	教育論	梅崎光生	—
5	クループスカヤ	1960	国民教育論	勝田昌二	—
6	ゲオルグ・ジンメル	1960	学校教育論	伊勢田福子	—
7	ホレーズ・マン	1960	民衆教育論	久保義三	—
8	バートランド・ラッセル	1960	教育と社会体制	鈴木洋蔵	この訳書を選集に入れるに当って、とくに東大の 勝田守一 教授には訳文の校閲をねがった。多忙な時間をさいてくださったことを心から感謝している。しかもなおわたくしの力の足りないところから思わぬ誤りを犯しているかも知れないがその点は一にかかってわたくしの責任である。[207]
9	フレーベル	1960	人間の教育 1	岩崎次男	—
10	フレーベル	1960	人間の教育 2	岩崎次男	—
11	フェスロン	1960	女子教育論	志村鏡一郎	最後に、わたしは、『女子教育論』を訳出する機会をあたえてくださったうえ、なにかにつけてお教えをいただいた。監修者のひとり 梅根悟 先生にはもちろんのこと、いろいろとわたしのわがまをここよりよく容れてくださった、明治図書出版 KK 編集部の木田尚武、森崎峻のおふたりにたいしても、ここからの感謝の念を擲けなければならないだろう。[173]
12	ルナチャルスキー	1960	労働教育論	矢川徳光	—
13	ヘルバルト	1960	一般教育学	三枝孝弘	—
14	ランジュバン	1961	科学教育論	竹内良知・新村猛	終りに、この翻訳を『世界教育学選集』の一冊に加えて下さった監修者と明治図書出版社に、とくに 勝田守一 氏と編集部の木田尚武氏に厚くお礼を申し述べることをお許しいただきたい。[4]
15	陶行知	1961	民族解放の教育	斎藤秋男	資料については、赤津益造・安藤彦太郎・島田政雄諸氏、また、方与巖・林煥平・巖文井諸氏および中国作家会協会外国文学委員会・安徽史学通訊社のご援助に感謝する。[207]
16	スバトコフスキー メディンスキー	1961	マルクス主義教育学の方法論	倉内史郎・鈴木秀一	いまわれわれは、この翻訳が出版されるにあたって、われわれがこれまでに矢川氏から受けた御指導と御好意の数々を思い、これからあらためて同氏にたいし最大の感謝の気持ちをおわりたいと思うものである。[242]
17	シェライエルマッヘル	1961	国家権力と教育 ：大学論・教育学講義序説	梅根悟・梅根栄一	—
18	シュブランガー	1961	文化と性格の諸類型 1	伊勢田福子	一、巻頭のシュブランガー教授の写真は、長井和雄先生が特に教授から近影として贈られ、常に机の上に飾って愛蔵しておられるものである。この訳書のために快くお貸し下さった御好意をここに記して深く感謝する次第である。[3]
19	シュブランガー	1961	文化と性格の諸類型 2	伊勢田福子	勝田守一 教授が教授の著作の1つをこの選集に加える計画があることを告げられた時にも、シュブランガー教授は早速、この著作が日本の分化に何らかの役割と期待を果たすことの期待と、日本への変わらぬ関心を述べられた。[220-221]
20	アルフレッド・ピネー	1961	新しい児童観	波多野完治	改訂の分相はつきりとおおりである。第1章〜第4章 坂元昌(東京工業大学助手) 第5章 私人保彦(和洋女子大学講師) 第6章〜第8章 滝沢武久(新潟大学講師) [3]
21	ナトルプ	1962	社会理想主義	篠原陽二	—
22	沢柳政太郎	1962	実際的教育学	清川道夫・中内敏夫(編)	—

23	コンドルセ	1962	公教育の原理	松島鈞	最後に、訳出に際して懇切な御教示をいただいた東京教育大学 梅根悟 教授、および「コンドルセ著作集」立法会議における公教育委員会事務局の両史料文獻の利用について、特に便宜を図って下さった一橋大学の松川七郎、鈴木秀勇両氏に深い感謝の意を表するものである。[4]
24	コメニウス	1962	大教授学 1	鈴木秀勇	ご多忙のうちに、貴重なお時間を下さりまして、綿密に訳稿をご閲覧たまわり、ご注意を下さいました 勝田守一 先生にあつくお礼申し上げます。[8]
25	コメニウス	1962	大教授学 2	鈴木秀勇	—
26	ロバート・オーエン	1963	社会変革と教育	渡辺義晴	—
27	ディーステルヴエーク	1963	市民社会の教育	長尾十三二	この書物は、早大教授尾形裕謙氏の御好意で早大図書館の蔵本を借覽させて頂いた。[3] 終わりに、日頃の學問はもちろぬ、本書の訳出に当たっても、訳出すべき論文の選択に再三の貴重な示唆を賜った 梅根 教授の多年の御指導に心から御礼申し上げたい。[8]
28	アンリ・ワロン ジャン・ピアジェ	1961	ワロン・ピアジェ教育論	竹内良知	世界教育学選集のなかにはワロンとピアジェの論集を入れることになって、その仕事をお引受けしたわけは、監修者である 勝田守一 先生の御意向をも向って、国際新教育連盟の機関誌『新時代のために』のなかから、ワロンとピアジェの論文を訳編することにした。[2] この本ができたのは、まったく 勝田守一 先生の御好意によってである。テキストはほとんどすべて先生の貴重な蔵書をお借りした。そのうえ東大図書館の蔵書から、所掲の論文の複写までつくっていただいた。先生の御配慮に厚くお礼を申しあげたい。翻訳にあたっては名古屋大学文学部仏文学研究室の山川篤助教授、平田諭治助手にいろいろお世話になった。また訳注をつくるうえで、2、3の人名について、同大学教育学部の江藤恭二助教授、山田正敏助手の御教示をいただいた。[4]
29	—	1963	日本プロテスタント人間形成論	武田清子 (編)	原典資料の選択に関し、石原謙先生、斎藤勇先生をはじめ、それぞれの関係の方々より貴重な助言をいただいたことを感謝する。[25]
30	プラトン	1963	国家 ：政治と教育	山田潤二	—
31	ヴィーヴェス	1964	ルネッサンスの教育論	小林博英	終りに、本稿の訳出にあたり、よき励ましを下ったことについては、本選集の監修者であり、共に訳者の同僚である 勝田守一・梅根悟 両先生に對し、また病に 梅根 先生には貴重な時間を割いて訳稿の欠陥を御指摘下さったことについて、心から感謝の気持ちをお伝えしたいと思う。[5]
32	デュルケム	1964	道徳教育論 1	麻生誠・山村健	本書の訳業については、東京大学教育学部の清水義弘教授に終始手厚い御指導をいただいた。[3]
33	デュルケム	1964	道徳教育論 2	麻生誠・山村健	—
34	ロビヨウ	1965	国民性と教育	田中昭徳・金子茂	終わりに、本書を『世界教育学選集』の一冊に加えてくださり、そのうえ、訳出すべき論文その他にいたるまで一方ならぬ高配を賜った、監修者の一人である東京教育大学教授 梅根悟 先生に、とりわけ深い感謝の気持ちを捧げることをお許しいただきたい。また、小樽商科大学広田二郎教授、中川勇治講師、ならびに東京教育大学・小樽商科大学の諸先生方には訳出についていろいろ懇切なご教示をいただいた。[6]
35	ベスタロッチ	1965	政治と教育 ：隠者のタ暮他	梅根悟	—
36	トマス・ヘンリ・ハクスリ	1966	自由教育・科学教育	佐伯正一・栗田修	—
37	エルヴェウス	1966	人間論	根岸国孝	※根岸 (翻訳者) と勝田 (監修者) との共著による解説が収録されている。
38	マンデヴィル アダム・スミス	1966	マンデヴィル・スミス教育論	浜田陽太郎	—
39	ルソー	1967	エミール 1	長尾十三二・原聡介・永治日出雄・桑原敏明	『世界教育学選集』に『エミール』を加えることになったから、君と、君のところの学生で引きつけてくれないか』という 梅根 先生からのお話が届いたのは、ちょうどその頃のことであつたと記憶している。[3]

						校正ならびに索引の作成については、東京教育大学大学院学生、奥平康照、清水重勇、古沢常雄、三笠乙彦、宮寺寛夫の諸君の積極的な協力を得た。[5] 最後に翻京の実務にこそ加わってはいないが、私どもの読書会や研究科に参加してしばしば貴重な意見を寄せてくれたようにたくさんの方をとってくれた前記の諸君のほか に中野光（現金沢大助教授）岩崎次男（現埼玉大助教授）志村純一郎（現静岡大助教授）椎名方吉（現千葉大助教授）金子茂（現九州大講師）斎藤新治（東京教育大学大学院）、小野信勝（東京大学大学院）、諸氏、その他ゼミナールに参加した大勢の学生諸君にも、ここのでやはり心からの挨拶を送らせていただきたい。[5-6]
40	ルゾー	1968	エミール 2	長尾十三二・原聡介・永治日出雄・桑原敏明		――
41	ルゾー	1969	エミール 3	長尾十三二・原聡介・永治日出雄・桑原敏明		――
42	ヴェ・ベ・グリスデフ編	1968	マルクス＝エンゲルス教育論 1	大橋精夫		――
43	ベ・エヌ・グリスデフ編	1968	マルクス＝エンゲルス教育論 2	大橋精夫		この『マルクス＝エンゲルス教育論』の編集企画は、はじめは矢川徳光氏と海後勝雄氏の協力をえて私がおこなうことになっていたが、のちに私一人にまかされることになった。[276]
44	トルストイ	1969	ロシア国民教育論	海老原道		――
45	ホール	1968	子どもの心理と教育	岸本弘・岸本紀子		また後者は 梅根悟 先生が推薦されたもので、ホール自身もいっているように、彼の心理学のよりどころであった先祖返りの説を教職的に、物語りふうに書いた田園詩ともいえるべく、彼の心理学的立場をうかがうには恰好の作品といえよう。[3] 七、本書の表題は、 勝田守一 先生につけていただいた。[4] 九、私たちのこの取組が目の目をみることは、ひとえに 勝田守一 先生と宮原誠一先生、それに明治図書のご好意による。[4]
46	ラスキン	1969	芸術教育論	内藤史朗		一、本書の題名『芸術教育論』は 勝田守一 先生の御同意を得て設けられたものである。[3] 五、本書は 勝田守一 先生の御好意により、 梅根悟 先生の御同意を得て、日の目を見ることがとなった。両先生に深く謝意を表する次第である。とりわけ、 勝田 先生には、御入院中にもかかわらず、訳文に目を通していただき、適切な御忠告をいただいた。[4] 六、本書を訳出するにあたって、英文学では工藤好美先生に御教示を乞い、終始激励をうけた。特に謝意を表したい。そのほか、画家下村良之介氏、イタリヤ文学者荒谷次郎氏、それに本谷大学の岩見至教授、水野有輔助教授などに御教示していただいた。[4]
47	キルパトリック	1969	教育哲学 1	村山貞雄・柘植明子・市村尚久		――
48	キルパトリック	1969	教育哲学 2	村山貞雄・柘植明子・市村尚久		なお、この肖像画の写真は、かつてキルパトリック博士の門下生であった西本三十二博士（現帝塚山学院大学学長）のご好意によるものであります。[350]
49	バゼドウトラップ	1969	国家と学校	金子茂		おわりに、日頃の学恩を思い 梅根悟 、長尾十三二両先生に感謝の気持ちを申し述べさせていただきますたい。[6]
50	スベンサー	1969	知育・徳育・体育論	三笠乙彦		その際、この題名について本書の監修者である 梅根悟 先生からのご示唆があったことを付記しておきたい。[3]
51	ラヴェット他	1970	イギリス民衆教育論	浜林正夫・安川悦子		本書の出版にあたっては多くの方々の御好意をうけたが、とくに、原稿に目をとおしていた 梅根悟 先生、文獻をお貸しくださった水田洋先生にむかひ御礼申し上げます。[275]
52	フリーエサン・シモン	1970	空想的社会主義教育論	西出不二雄		本書はじめに恩師 勝田守一 先生にお勧めをいただいて、東京大学の堀尾輝久先生と共同の仕事として進められるはずであったが、先生がフランスへ留学されたため私がひとりで担当することになったものである。[4] また、文獻の利用について便宜をはかってくださった福居純、二宮正之の両兄と、手厚いご支援をいただいた編集部の齋崎峰氏にお礼を申しあげたい。[4] おわりに、職業にあたってしばしば励ましをたまわった 勝田 先生にお礼を申しあげ、先生のご冥福をお祈り申しあげる次第である。[4]
53	フィヒテ他	1970	大学の理念と構想	梅根悟		――

54	垣内松三	1970	形象と理會	横須賀 眞 (編)	—
55	藤原助市	1970	批判的教育学の問題	梅根悟 (編)	—
56	フィヒテ	1970	ドイツ国民教育論	椎名萬吉	その間恩師 梅根悟 先生をはじめ、明治図書の方々はよくも耐えて下さったものと感謝しないではおられない気持ちでいっぱいである。[224]
57	エマソン	1971	人間教育論	市村尚久	なお、本書の底本とした『エマソン全集』は、日本女子大学植権明子先生の「好意により入手することができ、また邦訳にさいいしてもなにかと難題をたまわり、ここにあらためて謝意を表す。[4]
58	ケルシエンシュタイナー	1971	労働学校論	藤沢法映	—
59	阿部重孝	1971	教育改革論	宗像誠也・三輪定宣 (編)	—
60	カント	1971	教育学講義	勝田守一・伊勢田耀子	六、なお附録として本書に収めたベセドワの汎愛学院についてのヘルツの書翰およびクリスチアン・ハインリッヒヴォルケへの書翰と「公民社会に訴える」の三篇は、 勝田守一 教授の遺稿である。[4] 七、「教育学講義」および「学部争い」の両者の中に出来来るラテン語の訳出にあたっては、眞友南山大学助教授小林博英氏の労を煩わせた。多忙の中の貴重な時間をさいて下さった御好意に、厚く御礼を申し上げたい。[4] なお、 勝田 君は、この職業をカントの「教育学」を中心に、それに関連する諸論でまとめるつもりであつたらしく、「学部争い」は必ずしも、彼の計画に入っていないなかつたようであるが、私はあえて伊勢田さんに乞うて「学文の争い」を加えてもらうことにした。[202・梅根]
61	トウニイ	1971	すべての者に中等教育を	成田克矢	本書を翻訳することになったのは、旧友柴田義松君のお口添えによるものである。[188] 監修の 梅根悟 博士は、私の留守中に本文取稿に目を通して下さり、いくつかの適切な助言をしていただいた。[189] なお、最後になって恐縮であるが、巻頭のトオニイ教授の写真は、矢口孝次郎先生が特別のご厚意をもって提供して下さいましたものである。[189]
62	ジェファアソン他	1971	アメリカ独立期教育論	眞野宮雄・津布菜喜代治	訳出の作業はかなり長期にわたり、その間、 梅根悟 先生はじめ東京教育大学および宇都宮大学の関係教授の方々に、御教示を賜たり、また一部には東京教育大学大学院の教育制度までミにおける成果も含まれている。[3]
63	モリス	1971	民衆のための芸術教育	内藤史朗	一、本書の題名は、 梅根悟 先生に示された「民衆のための芸術教育」「民衆の芸術とその教育」の二つのうちから訳者が選んだものである。[3] 四、訳稿に目を通していただき、懇切な教示をいただいた 梅根悟 先生に心からの謝意を表す次第である。[4]
64	木下竹次	1972	学習原論	中野光 (編)	本書を編集し、解説を執筆するにあたって木下龜城氏からは種々のご教示とご配慮をいただいた。
65	タレイラン他	1972	フランス革命期の教育改革構想	志村鏡一郎	それにしても、 梅根悟 先生には、たえず貴重で適切なご教示をいただいたばかりか、あれこれと、ほんとうにお世話をかけしてしまいました。もちろん、ほかにも、古沢常雄さんをはじめ、いろいろな方々から、いろいろの御教示をいただいたこと、心からの感謝をささげなければならぬのですけれど……。[197]
66	ヘルバルト	1972	世界の美的表現 ：教育の中心任務としての	高久清吉	—
67	ペイリ	1972	自然学習の思想	宇佐美寛	監修者 梅根悟 先生には、いろいろと貴重な御指導をいただいた。[8]
68	フレーベル	1972	幼児教育論	岩崎次男	ここに収録した論文などの選択およびそれらの配列と構成など、さまざまな点について筆舌に尽くしがたい深い御指導を恩師 梅根悟 先生からうけたことを、ここに記して、感謝申しあげたい。また、文献の探索と蒐集には広島大学の柿原知可子さんに御援助をいただいたこと、さらに編集部の方々、とりわけ篠崎峻さんにはなにかと暖かい御配慮をいただいたことについて、感謝申しあげたい。[9]

69	及川平治	1972	分団式動的教育法	中野光 (編)	おわりに、本書の編集ならびに解説の執筆にあたっては、さきに出版された木下竹次「学習原理」のときも同様であったが、 梅根悟 先生から適切な助言と私にとってはきびしい指導をうけることができた。[335]
70	ペリー クライン	1972	数学教育改革論	丸山哲郎	本書の執筆を助めて下さり、数多くの貴重な御意見をいただいた速山啓先生 (東京工業大学名誉教授、数学教育協議会委員長)。ガラ刷りに目を通された上、いくつもの誤りを指摘していただいた中谷太郎先生 (日本工業大学教授)。東北大学図書館からペリー、クラインの原著を借り出したり、コピーをとるさいに労を惜しまれなかった佐々木重夫先生 (東北大学理学部教授)、下平三郎先生 (東北大学金属材料研究所教授)。ペリーの原著のコピーを借していただいた黒田梅太郎先生 (数学教育研究家)、翻訳のさいのいろいろの留意点を教えていただいた黒田三郎先生 (専修大学教授)。ペリーの稿に目を通して、誤りを指摘していただいた大森伴子さん (静岡県豊田高等学校教諭)。そして不断の研究と実践の中で御教示いただいている数学教育協議会の多くの先生方。[4-5]
71	ヘルンレ	1972	プロレタリア教育の根本問題	五十嵐順	この小説とヘルンレにかんする小研究にとって、名古屋大学大学院におられた保田正毅氏との研究交流に負うところすくない。[212]
72	舒新城	1972	中国教育近代化論	阿部洋	末尾ではあるが、本書の作成にあたり、資料の収集やその解釈などで多大の御指導と御協力をいただいた恩師の国立教育研究所長平塚益徳博士、専修大学教授斎藤秋男氏およびアジア経済研究所員小林文明氏に対して深く感謝の意を表わすものである。[3]
73	ヴィルマン	1973	陶治論としての教授学	竹田清夫・長谷川栄	—
74	ラ・シャロット	1973	国家主義国民教育論	古沢常雄	長尾先生、 梅根 先生、東京教育大学外国教育史研究室の皆さんの助ましがなかったら、この訳業はさらに遅れたことと思われます。[193]
75	シャツキー	1973	生活教育論	森重義彰	—
76	山下徳治	1973	明日の学校	海老原治善 (編)	なお巻末の「著作論文目録」は、日本社会福祉大学の柿沼肇氏と御子息森礼二氏の作成になるもので本書に収録することを許して下さい。[260]
77	モンテッソーリ	1974	モンテッソーリ・メソッド	阿部真美子・白川啓子	御多忙のなか、解説について貴重な御指導をして下さった 梅根 先生には、お礼の言葉もないほどの感謝を感じる。[260]
78	ロバート・オーエン	1974	性格形成論 ：社会についての新見解	斎藤新治	最後にいろいろと御指導いただきました 梅根悟 先生、長尾十三三先生に深く感謝申し上げます。[4]
79	三宅米吉	1974	三宅米吉教育論集	森田俊男 (編)	本書の素地は 1968 年東京教育大学大学院教育学研究科博士課程外国教育史講座において長尾十三三先生のご指導の下に始めた共同研究「ロバート・オーエン研究」にある。[198] 冒頭の性格形成原理の訳について、 梅根悟 先生および小林虎五郎先生に目を通していただき、オーエンの真意の伝わる訳文になるよう貴重なご教示をいただいた。[198]
80	パーカー	1974	ドルトン・ブランの教育	赤井米吉 (訳)・中野光 (編)	編者は、 梅根悟 先生の教示をうけつつ、その責任において、三宅に日本の近代の学問としての教育学の形成ないし萌芽をみる、という観点をとった。[3] すでに三宅の歴史教育論を歴史教育史に位置づけることをされている海後宗臣、松島栄一両先生からは、たびたび三宅理範の脚を示していただいた。[4] そして、三宅の創設した東京高師の歴史学教室をひきついで、いま教育の国家からの自由の確立のために力を尽されている家永三郎先生からも一度ならず三宅継承のしかたについて教えていただいた。[4] ※梅根による解説が収録されている。
81	アルベルティ	1975	イタリア・ルネッサンス期教育論	前之園幸一郎・田辺敦子	編者は、本選集の監修者である 梅根悟 先生との相談のうえ、訳者の翻訳原稿に、かつての訳者のパーカーズトがはじめた来日した (1924 年) 前後に執筆・発表した 3 つの論考を付録として加え、それに編者の「解説」をつける、というかたちで本書を編集した。[3] 一、田辺が担当したアルベルティの「家庭教育論」とピッコロミニの「子どもと教育について」の訳出にあたっては、元イタリア文化会館員のマリノ・サルヴィオ氏と東京都立大学教

82	ブロンズキー	1975	労働学校と総合技術教育	三沢正博・佐島勇治郎	授大蔵隆雄氏に懇切なご教示をいただいたことを深く感謝致します。[3・4] 本取書の誕生は故勝田守一先生のご教示のご好意によるものである。訳者たちは、イタリア政府奨学生として前後して留学の機会を与えられた。訳者のひとりである前之園がローマ大学留学中（1968年）、勝田先生よりお手紙をいただいた。イタリア・ルネッサンス期の教育論について、このわが国への紹介を、一考せよとのご指示であった。前之園のプランにたいして、おかりかしこまかなご助言とともに梅根悟先生のご意見までぞえられたご返事をいただいた。[209]
83	バーカー	1976	中心統合法の理論	西村誠・清水貞夫	終わりにあたり、本書の訳出にあたって、自ら訳稿に目を通され、御指導を賜った梅根悟先生、直接間接に助言をいただいた和光大学の中野光教授、それから最後まで再三約束違反で御迷惑をかけた明治図書の高崎峻氏に厚く御礼申し上げます。[280]
84	ベスタロッツ	1976	ゲルトルート児童教育法	長尾十三二・福田弘	梅根博士の『エミール』講読をうけつた成果が、さきに原、永治、桑原との共訳で『エミール』（1）、（2）、（3）として刊行され、今回また同博士の『夕暮』ゼミの訳語をうけつて『ゲルトルート』ゼミの成果がこうして上梓されることになったわけで、この経緯を思うにつけても、本書が梅根博士の学恩に報いるのに、いくらかでもふさわしいものとなっていることを心から念じずにはいられない。[4]
85	ドクロリー	1977	ドクロリー・メソッド	斎藤佐和	どんなに急いだとしても勝田先生の存命中に翻訳を完成させることは困難であったにちがいないが、10年近い日々を要することもなかったはずである。暖かい励ましを頂いた先生を思ひ、怠惰の身を顧みて世に詫言を遺すにはいられない。勝田先生なきあと御指導をたまわった梅根先生、『全体化機能と教育』の原書をはじめ参照した資料の殆どを貸して下さり、また重なる御助言を頂いた堀尾輝久先生（東京大学教育学部）に心から厚くお礼申し上げたい。また訳者が現在籍を置く東京教育大学教育学部リハビリテーション教育研究施設（聴覚障害部門）の星龍雄助教授（現筑波大学）には医学用語などについての御教示を仰いだ。[4]
86	ユング	1977	生活共同体としての村の池	山内芳文	梅根悟、長尾十三二両先生には、せつかくお勤めをいただきましたながら、このような遅れたわりには粗末な出来しかお目にかけられないことをお詫びしたいと思う。[3]
87	デューイ	1977	実験学校の理論	大浦猛（編） 遠藤昭彦（訳）・佐藤三郎（訳）	訳書の課題は、数年前この選集の第二期の企画がたてられた時に与えられていたが、訳者の怠慢によって長い間そのままだになっていたことを、監修者の梅根悟先生をはじめ企画の方々に對して申し開きをすることができない。[3]
88	ドモラン	1978	新教育 ：ロツシユの学校	原聡介	なお、この取書は本書に関心を抱く体育史家の清水重勇高知大学助教授の協力に多くを負っている。[3] ※清水重勇の解説が収録されている。
89	ベリンスキー チェルスイシエフスキー	1978	革命的民主主義教育論 1	小沢政雄・海老原通	——
90	ドブロリユーボフ ゲルツェン	1980	革命的民主主義教育論 2	海老原通・福田誠治	したがって、本書では教育関係のものにふれる機会をより多くするために既約のものを避けて、池田貞雄氏に訳すべき論文を選択していただいた。[9]
91	グーツムーツ	1979	青少年の体育	成田十次郎	『世界教育学選集』とよばれる優れた企画の中に、体育の領域からこの書物を入れていただいたことに対して、また、頃々からの学恩に對して、梅根教授と長尾十三二教授に尽きぬ感謝を捧げたい。[7]
92	ベスタロッツ	1980	シュタントツ便り他	長尾十三二・福田弘・山岸雅夫	梅根博士の関心が、「世界教育史体系」（講談社）の刊行中から、次第に教育方法、とくに数科教育の問題に推移してきたことを知っているだけに、——じつさいは、「世界教育史体系」の総編として、「世界教育史体系」の構想を具体化するようにならば指示されてもいいのである——この職業がせめて博士の生前に完成していたなら、と悔やまれてならない。[165]
93	トルストイ	1980	トルストイ自由主義学校	佐々木弘明	——

94	アラン	1981	児童教育論	松島鈞	最後に、この世界教育学選集の監修者である、恩師の岩 梅根悟 博士のご霊前に本書を捧げ、つつしんで先生のご冥福をお祈り申し上げますものである。
95	エストライヒ	1980	弾力的統一学校	中野光・保田正毅・川口祐二	したがって、本書は文字とおり三人の共訳であるが、(2) については、長尾十三二氏（立教大学教授）にも校閲していただいた。 ^[3] いまよやうやくにして完成したことに三人の訳者は安堵の息をつくおおいではあるが、いっぽうでは 梅根悟 先生のご健在のうらにおめにかけることができなかったことを悔いる。 ^[4]
96	クインティリアーヌス	1981	弁論家の教育 1	小林博英	そしてこの選集の二人の監修者はともに私の大学院時代の恩師であられたが、 勝田守一 先生は早く失ってしまい、ついで去る二月には遂に 梅根悟 先生の訃報をもお聞きしたとき、この抄訳の完成は監修者に見て頂けないことになってしまったわけである。 ^[7] ともあれこの訳業のために広島大学河蔵の上述のカラーペロニエル版その他の重要文献を指示下さったこの道の先輩の元広島大学教授榎尾壮英先生に心から感謝申し上げたい。 ^[7]
97	クインティリアーヌス	1981	弁論家の教育 2	小林博英	――
98	アウグスティヌス	1981	アウグスティヌス教師論	石井次郎・三上茂	――
99	福沢諭吉	1981	福沢諭吉教育論集	上沼八郎（編）	すでに監修者の 梅根 勝田 両氏は早稲に入られたが、おそらく地下で墓んでおられることであろう。本書の刊行に対して期待を寄せてくださった大田勉氏、長尾十三二氏及び担当の巖崎氏にもここで厚く謝意を表しておきたい。 ^[240]
100	E.M.イタール E.O.セガン	1983	イタール・セガン教育論	大井清吉・松矢勝宏	薩摩児教育に関する古典を本選集のなかに加えるというの(は、監修者である 梅根悟 先生の最初からのご希望であったと聞いている。 ^[4]